

「シドニー便り 2. 0」(第12回)

～ ANZAC Day ～

4月26日

4月25日は ANZAC Day。第一次大戦中の1915年4月25日、オーストラリアとニュージーランドの合同陸軍部隊(ANZAC)が、トルコのガリポリ半島上陸に挑戦し、多数の兵士が犠牲になりました。8千人以上が命を落とし、1万8千人以上が負傷したと言われています。

この日は、オーストラリア全土で、勇猛果敢に困難な作戦に挑戦した兵士たちの勇気と愛国心と献身を称え、犠牲者を追悼し、彼らの功績に敬意を表する行事が行われます。国家として、過去を真摯に振り返り、未来に思いをいたす日として、国民の祝日となっています。第一次大戦に限らず、第二次大戦、さらにはその後の紛争や国連 PKO に参加して命を落としたオーストラリア人兵士も追悼の対象になっています。

日本の8月15日に相当する日と言って良いでしょう。

ガリポリ上陸作戦は犠牲者を多く出し、「失敗」に終わったというのが専らの評価です。今回のアンザック・メモリアルにおける演説で、ビーズリー州総督は、この作戦を「military disaster」と形容しました。オーストラリアは第一次大戦、第二次大戦、いずれも戦勝国です。それでも、「戦勝記念日」を祝うのではなく、失敗した作戦の日を国家の祝日としていることを、オーストラリア初心者の方は、最初、不思議に思いました。(ちなみに、私がかつて勤務したロシアでは、5月9日の「対独戦勝記念日」は、大統領以下要人が出席し、壮大な軍事パレードが繰り広げられるなど、最も重要な祝日であるとされています。)

その後、この戦いが、①1901年の連邦国家発足から間もないオーストラリアにおいて「オーストラリア軍隊・兵士」としてのアイデンティティを形成する場になり、②国家としての一体性・主体性・独自性を強める契機となり、③オーストラリアが過去の犠牲者の献身を基礎に国家として未来に踏み出すきっかけになった、非常に意味のある日である、と指摘されていることを知りました。

以上は前置きとなります。

4月25日は3つの行事に参加しました。

昨年9月末に着任した私にとり、初めての ANZAC Day でした。

一つはニューサウスウェールズ州退役軍事連盟(RSL NSW)が主催する追悼式典(Commemoration Service)です。ハイドパークのアンザック・メモリアルを舞台に、州総督をはじめとする要人が参加してスピーチを行う、NSW州でもっとも大規模な行事です。一般の人々もハイドパークに集い、州総督の演説に耳を傾けていました。スコッツ・カレッジをはじめ、学生の参加も多く見られました。



二つ目は、同じくRSL NSWが主催する、当地領事団向けの式典です。「Consular Star Ceremony」と称し、各国にゆかりのあるオーストラリア軍人の名前が記された星形の紙が、参加者一人一人に渡され、渡された参加者はその星型をメモリアル・サービスの中の「瞑想の井戸 (Well of Contemplation)」に投げ入れます。私が頂いたのは、東京で生まれ、多くの言語を学び、その後オーストラリア軍に従軍して第一次大戦をフランス戦線で戦い、退役後は戦後の初代駐日「英国」大使を務められた Sir Esler DENING 大使でした。この井戸の天井は1万2千個の小さな金色の星で埋め尽くされています。この天井の星一つ一つが第一次大戦に NSW 州から従軍した人々を象徴しており、投げ込まれた星形の紙は火葬され、戦地への慰霊の際にその灰がまかれるという説明を頂きました。



三つ目の行事は、私が居住するウーララ市(Woollahra Council)の市長の主催によるものです。地元の退役軍人とその家族が多く参加しており、厳粛ながらも祝日のファミリー・イベントのような和やかな式典でした。私は、名前・肩書を紹介された上で、献花をする機会を頂きました。式典後、多くの地元の方々が近寄ってきて、参加への謝意を伝えられ、和やかな懇談ができました。



日本とオーストラリアの過去を振り返れば、第二次大戦時の敵国であり、当時の安倍総理が2014年にオーストラリア議会で言及したように、ココダの戦闘やサンダカン「死の行進」といった、多くのオーストラリアの兵士が命を落とした苦痛の歴史が存在します。かつて、駐オーストラリア日本大使の最も重要な任務の一つは、「和解」でした。日本人が ANZAC Day に外出するのは攻撃の対象になりかねないから危険であるとして、自宅待機を要請していた時代もあったと聞きます。

それでも、多くの先人たちのたゆまぬ努力により、日本とオーストラリアは戦後の和解を成し遂げ、今日の二国間関係は最良の状態にまでたどり着きました。

私が在シドニー日本国総領事として、ANZAC Day への献花の機会を得て、地元の人々から出席を歓迎される。このことはあたり前のことではありません。両国の和解に尽力された先人、先輩たちのたゆまぬ努力の賜の結晶であると改めて実感する次第です。戦後の日豪関係の構築に尽力された先輩方への感謝の想いを胸に抱き、帰路につきました。

(以上)